

石井十次賞とその生涯について

石井十次は1865年（慶応元年）4月11日宮崎県高鍋町に生まれた我が国児童福祉の先駆者であり、食べさせる事だけではなく、労働を通じて教育することが大切であるとの信念のもと、実に3000人を超す孤児救済に生涯をささげたのであります。

幼少の頃から思いやりの深い人で、8歳のころ近くの天神様の秋祭りに、母親から木綿の着物に紬の帯を結んで買って出かけたところ、松ちゃんという友達が、縄の帯をしめていたのを多くの友人から見られいじめられていた。これを見かねた十次は、締めてもらった紬の帯と、縄の帯とを取換えてやったのです。祭りから帰ってきた十次の姿を見た母親は十次から訳を聞き「それは大変よいことをしたね」と喜んで褒めてやったのでした。このときの母親の言葉が成長していく十次の心根に大きな影響を与えることになったのです。

十次は生来学問好きで1879年（明治12年・15歳）東京芝政玉社に入学したが、1年あまりで脚気をわずらい帰郷しました。当時は西南の役後のことでもあり、天下国家を論じたばかりに西郷軍の残党と嫌疑を掛けられ、16歳で国事犯として獄に送られ、未決在監1カ月余りで無罪放免となったが、その在監の折西郷隆盛の滅私奉公・敬天愛人・私学校の教育・吉野村の開墾などの事績を聞き、西郷の人格とその教育理念、名利を求めぬ純粹な心に深い感銘を受けたのであります。

18歳のとき、岡山の医学校に入学したが、23歳（明治20年4月）住んでいた家の近くの大師堂で親子3人の巡礼と巡り合い、その子供を引取り面倒をみるようにしたのが最初の孤児との出会いでした。その後次々と薄幸な孤児を助け、医学と孤児救済のどちらを選ぶがよいか大変迷いました。信仰していた聖書の「人は二主に仕えるあたわず」の教えに従い、「医者には誰でも出来るが、孤児の面倒は自分でなければならない」と確信し、孤児のために一生を捧げることを決意したのです。

孤児の数もだんだん増加し、27歳（明治24年）濃尾地方の大地震が起こり（死者7300人・倒屋18000戸）多数の震災孤児を救済し、名古屋に震災孤児院を設けることに没頭しました。

33歳（明治30年）孤児教育を進めるため「岡山孤児院尋常小学校」を設立しました。当時の社会情勢では、国民はまず食べることが先であり教育の関心は低かった（両親健在の就学率—男子85%女子47%—宮崎県）が逆境の孤児たちに100%の就学を実践したことは、孤児院は養育院ではなくて教育院であるとの理念に基づき石井十次の人間愛と思いやりを物語るものであります。



「石井十次賞」
正賞の楯

（石井十次のブロンズ像
と 茶臼原憲法）

明治35年(38才)には、藍綬褒章の栄に輝き、37年に天皇・皇后両陛下より、2000円御下賜金をたまわり、翌38年より毎年1000円を10年間賜ることとなり、この頃から石井十次の事業について、社会の各層から高い評価と認識を得るようになったのであります。

明治39年、東北地方の冷害による凶作で、窮民は子供を捨て愛児を売って糶に代えるなどの状況がおこりました。日露戦争で父を失った孤児も加わりましたので石井十次は824名の子を受入れ、それまでの収容児とあわせその数は1200名にも達したのであります。十次の孤児収容の考え方は全くの無条件で、たとえ食べる糶がなくとも困窮している子供がいればすべて収容し引き受けるという底知れぬ方針でありました。彼の日常生活は、体力の限界を上回る無理を重ねた酷使の連続であったので、ついに腎臓炎に侵され、大正3年1月30日49歳という短い生涯を閉じたのです。かれの一生は3000名を超す孤児たちのために捧げた実に尊いものであります。

石井十次の没後は、大原孫三郎などによって「岡山孤児院」の偉業は引き継がれ、昭和になってからは「石井記念教会」の名称のもとで活動が続けられていました。

戦後昭和20年には、多くの戦災孤児の養護のため、石井十次の孫 児嶋堯一郎が石井十次の意思を継ぎ、慈愛の心を生かし続け「石井記念友愛社」として再発足し、現在は曾孫の児嶋草次郎によって養護施設2カ所・保育所5カ所デイサービス施設1カ所が経営されて今日に至っています。

このような石井十次の精神を継承し多くの人々に広めていくことが、現在の社会においてはより必要なことと考えています。我が国におけるボランティア精神と社会福祉の意識の高揚を図るため「石井十次賞」を創設いたしました。

石井十次が生涯をかけて実践した人間愛と思いやり、児童福祉への願いにふさわしい業績のある個人・団体・施設を表彰いたしております。

ついでには、別紙要領のとおり、都道府県および政令指定都市の社会福祉協議会と個人推薦人を通して全国的に表彰候補者を募集するものであります。格別のご配慮をお願い申し上げます。





◎ 石井十次賞の主旨

わが国児童福祉事業の先駆者である石井十次の精神と実践を継承し、発展させることを目的として創設。個人あるいは団体に対し、一点を選出し、毎年行うものとする。

◎ 石井十次とは

現在のように豊かな時代とは異なり、「福祉」という言葉さえ定着していなかった明治20年、22歳の若さで孤児救済の事業に着手した、石井十次は、1865年（慶応元年）宮崎県児湯郡高鍋町に生まれる。

十次は、岡山孤児院を創設し、さらに大阪の愛染園託児所、郷里の宮崎県に茶臼原孤児院などを設置し、日本における社会福祉事業の先駆者としてその生涯をささげた。明治24年濃尾大震災では、93名の災害児童を救済救護。院内に尋常高等小学校を設立し、一般家庭をはるかに上回る教育を実践し、また乳児里親制度の創設など福祉事業界に新生面を開いた。

明治39年東北地方大飢饉による孤、貧児800名を収容し、在院児1,200名にのぼった。

『君は、ほとんど他に類型なき存在の一人、聖僧の如く、英雄の如く常識者でもあり、非常識者でもあり、……』。時の文豪、徳富蘇峰は、十次が孤児たちで結成して全国を廻った音楽幻灯隊を前に、こう敬意と感謝の言葉を述べた。

大正3年、49歳で世を去るも、今も十次の精神は石井記念友愛社として引き継がれている。